

ランチタイムセミナー講演記録

第4期 第4回

国際化と日本人の意識

講師：橋爪大三郎氏
(東京工業大学助教授)

1992年12月17日(木)
東京ステーションホテル

レジャー・サービス産業
労働情報開発センター

<INDEX>

資料：レジュメ・・・・・・・・・・・・・・・・レジュメ1～2

講演記録・・・・・・・・・・・・・・・・P1～20

<講師の紹介／はしづめ だいさぶろう氏>

1948年生まれ。1977年、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。

以後無所属で、執筆に専念。

1989年～ 東京工業大学工学部助教授(社会学専攻)。

《主な著書》

『仏教の言説戦略』(勁草書房)～仏教を、言語と言語を超えたものとの運動と捉える
『はじめての構造主義』(講談社現代新書)～構造主義を西洋近代の自己批判と捉える
『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)～憲法を素材に、社会の成り立ちを考える
『現代思想はいま何を考えればいいのか』(勁草書房)～バブル以後の日本の思想を考える
『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)～市民社会と国家の関係を考える
『小室直樹の学問と思想』(弓立社)～ソ連崩壊予言を、社会科学の総合力で分析する

国際化と日本人の意識

1. 国際化とはなにか

(1)international 国際的↔national国民的、一国家的、近代国家的

「国際」という観念は、近代的な意味での国民国家が、世界の構成単位となって成立
Cf. 中世～普遍性(教会・ラテン語・大学・神聖ローマ帝国)＋民族性(土着国家)

(2)ナショナリズム……普遍的な原理に抗して、国民国家が自己主張する運動

言語・文化・法律・制度・経済主権(租税・関税)・教育・人間の移動……の掌握
国民国家 nation state 国民(言語・文化・人種…が共通な人びと)を基礎にする

(3)日本の場合、普遍性・対・民族性の争いが、深刻に意識されることはなかった

日本～自然的(≠人為的)な境界～自覚しないまま<内>に閉じこもる傾向あり

～自覚しないまま<外>を攻撃する傾向あり

Cf. 中国～周囲に人為的な境界～中国そのものが異質なものの統合(=世界=国際社会)

2. 日本の国際化はなぜむずかしいか

(1)EC(ヨーロッパ共同体):ナショナリズム⇔インターナショナリズムへの道

ナショナリズムが人為的にこさえたものだから、国際機構に改造できる

↔日本の社会の場合、その意識が希薄 せいぜい「国際性」を取りこむという意識

(2)<外>をとりこむ運動↔<内>に閉じこもる運動 :日本史の基本リズム

①聖徳太子の改革……四つの古代(現代)化:農業、工業、科学技術、国防の古代化
律令(=中国の法・政治制度)の移入、均田法(=中央集権的国家社会主義経済)
の移入、兵制改革、官僚制、大学制度、国分寺、……。

②国風文化……中国文化がなしくずしにデフォルメされていく過程

荘園制(公地公民制の否定)、武士(兵制の否定)、公家法・武家法(律令の否定)

③安土桃山時代……西洋との接触:鉄砲、キリスト教、工芸品、…… 信長に刺激

秀吉は、日本をそのまま中国に拡大しようとする(元寇の裏返し) 日本=夷狄

④鎖国……鉄砲と儒教によって、キリスト教(に象徴される西洋文明)を排斥

暗黙裡に<外>を意識した、<内>への閉じこもり 日本的なものの再生産

⑤明治維新……尊皇攘夷勢力が開国に転ずるパラドックス 西欧近代文明の受入れ

当時は、ちょっとだけ開国して国力をつけ、また鎖国するつもりだった?

⑥大東亜共栄圏……西欧文明の排撃 国粹主義 ウルトラ・ナショナリズム

しかし、そうした反西欧的なスタイル自身が、西欧的なもののひき写し

⑦戦後民主主義……アメリカの制度(政治、教育、文化、経済、科学技術、国防……)

の移入 反米主義～左翼～社会主義の奇妙な結びつき

⑧国際化の時代……コンプレックス(対欧米)/優越感(対第三世界)のないまぜ

<外>と接触するほど<内>に閉じこもりたくなる、という逆説

(3)日本人は、異なる民族との深刻な摩擦を経験していない→基礎的な条件の欠落

↔文明(国際的な文化・社会制度):民族の摩擦を前提に、それを乗り越える工夫

3. 日本人は国際化のために、なにをしたらいいか

(1)勘違いの国際化=<外>と接触の割合が増えること 結果⇒やっぱり日本がいい

①外国語ができるようになる ひとつの手段にすぎない 外国語=英語?

②外国に旅行する →すぐ日本に戻ってくる(お客さん)

③外国の事情(文化、思想、風俗)に明るくなる 情報ギャップに寄生する商売

・①～③のようなことが評価されるのは、<外>が稀少である社会(つまり<内>)に
ほかならない。ということは、国際化と正反対のロジックが支配する社会だということ。

(2)日本の固有性・独自性に気がつく 自分がなにものであるか知る→他社と関係がとれ、
他者を尊重できる→相互理解と交流ができる 国際語としての日本語(政策)

(3)過去を十分に振り返る 歴史:自分をどのような過去が規定しているか～無意識

戦争責任～賠償問題 従軍慰安婦、軍票、残留孤児、戦争責任、歴史記述、補償など

(4)異文化について理解を深める⇒自文化を相対化し、その根拠を問い直す

(5)日本にいる外国人について、きちんと対応する 在日韓国・朝鮮人などの「市民権」

(6)日本の社会制度を、国際規格に合うように手直りする

大学(人事の国際化、9月入学、単位の互換性)、政府(許認可行政の廃止、人事の流動性)、
企業(雇用慣行の見直し)、地域(外国人を想定した見直し)、……

(7)日本人の行動原理を、国際社会に適合的なように改める

・日本人の行動原理:<内>の問題解決 問題の所在や状況を理解できる、価値観
↓ を共有する人びとのあいだでの紛争処理

・脱日本的行動原理:<外>に通じる問題解決 <内>に閉じないようにするため、
つねに<外>のメンバーがもう一人そこにいると考えて行動する。

4. さらに具体的には……

(1)日本の国際戦略の構築 アメリカを、ECとともに補完する勢力としての東アジア
日本は、その中心として、世界の安定に責任を持つ

(2)アジアの共通項を模索する(大東亜共栄圏の総決算) 中国・韓国との対話

(3)国際機構の設計 地球環境保護(特に炭酸ガス)の枠組み } たとえばエコライト
国際通貨・金融・援助の枠組み } (排出権)構想
国連の改組 拡大常任理事国(五大国+拒否権のない日独)制

(4)日本の労働組合は、<内>の原理(企業別)に圧倒されてきた。→<外>の権利を保障
する運動に、脱却してもらいたい。

今日いただいた題は「国際化と日本人の意識」です。国際化時代と言われるようになってから、もうだいぶたちます。1966・7年に海外旅行や為替の規制がだんだん緩んできて、それまではクイズにでも当たらないとハワイには行けなかったものが、ちょっとお金を貯めれば、あるいは新婚旅行などでハワイに行けるようになった。そのときに持ち出せる外貨も少しずつ増えてきました。海外旅行というのが、収入の上の階層からだんだん生活の中に入ってくるようになったわけです。

1970年に大阪で万博があり、70年代には近所に海外旅行に行ったことがある人があるような感じになって、農協も団体で行く。80年代以降はもう日常化していて、リピーターばかりになってしまいました。

70年代以降、日本の高度成長が一段落してから、日本の為替が緩み、通貨もどんどん緩んできて、自由化が進んだわけです。そういう全体の流れの中で、日本人だけが変な行動をしていると見られる機会も多くなり、それで国際化ということがしきりに叫ばれるようになったのだと思います。

結論からいえば、これはあまりうまくいっていないのではないかと思います。それは日本人の努力が足りないとかいう問題ではなくて、どこかにボタンのかけ違いとか、勘違いのようなものがあるのではないかと。日本人が国際化のつもりで努力しても、必ずしもいわゆる国際化にはならないという点があります。そこで、そのボタンのかけ違いのもとにさかのぼって問題を整理してみようというのが、今日私がお話しする趣旨です。言ってみれば常識のようなものですが、私なりに問題をなるべくきれいに整理して、将来の指針としたいと思うわけです。全体が4つに分かれておりますが、2と3を中心に述べたいと思います。

1. 国際化とはなにか

(1) international と national

最初に、国際化とはなにかということです。

国際化というのは、“INTERNATIONAL”という言葉日本語に訳したものです。“INTER”は「際」と訳しますが、国際のほかには「学際」というのが有名です。学際は“INTERDISCIPLINARY”の訳ですが、“DISCIPLINE”は確立した学問という意味でして、たとえば経済学と政治学の間のことが学際ということになります。

国際も同じ意味で、ネーションというまとまり、ナショナルなものが、例えばドイツとかフランス、イタリアというふうにまとまって実体としてあるわけです。その間にある何か、たとえば国際機関、あるいは両方の国籍を持っている人、特有な文化があったりすると、そういう現象を全部国際と言うのではないのでしょうか。ですから、考え方の順番としては、まずナショナルなものがあって、その上に、そこに収まらないものを考えていこうという発想です。

そこで、ナショナルについて考えてみますと、ネーションは国民と訳されますが、ナショナルというのはインターナショナルの反対であって、国民的、つまり日本国民なら日本国民、フランス国民ならフランス国民ということです。もう少し突っ込んでいきますと、特定の国家に関することであるので、一国家的である。さらに突っ込んでいきますと、ネーションというものの成立はそんなに古いことではなくて、歴史上、近代に属するものなので、近代国家的、ネーションステートという意味合いがあるのではないかと。だから、国民的であるという状態を超える、一国家的であるという状態を超える、近代国家的であるという状態を超える動きを国際化と称することができるのではないかと思います。

以上をまとめますと、近代的な意味での国民国家というものが17～18世紀頃、世界の構成単位となりました。ヨーロッパを中心に大きな動きが起こりまして、今日のイギリス、フランス、遅れてドイツ、イタリアという国家ができあがってくる時期に、それに相応する概念としてインターナショナリズムが出てきたのではないかと思います。

ちなみに、それ以前はどういう状態になっていたかといいますと、それ以前でも各民族や各地域にとらわれない全世界的、世界と言うのが大げさであれば全ヨーロッパ的な動きはいくらかありました。しかし、それは国際的という観念ではとらえられなかった。なぜならば、ネーションというものがはっきりしなかったからです。そこで、それは普通は普遍的、ユニバーサルというふうにとらえられます。

典型的に言えば教会です。教会というのは各民族、各地域にとらわれない、もっと大きな世界大のまとまりです。アレキサンドリアとかシリアのほうの教会は音信不通になってしまったので、ローマとビザンチンの教会を中心にして、全体が一つの組織にまとめられている。言葉も、ラテン語あるいはギリシア語という共通語があって、初めから国際機関なんです。

それは普遍性という言葉で理解されていた。その普遍性の足を引っ張るけしからんものとして、民族性とか土着性というものがあって、本来国際機関であるはずのイギリスの教

会が英国国教会になっていたり、ドイツがローマから切れるというように、普遍性が踏みにじられていく。中世の考え方からすれば、近代はそうに見えるわけです。普遍性が、だんだん実体がなくなってボロボロになっていって、その代わりに国民国家が出てきたわけです。そうすると戦争になってしまうんですが、それではしょうがないので、それを超える人類社会の原理があっていいということから、その反対概念として国際化というのがいつでも唱えられているということだと思われます。

ほかに普遍的なものとしては大学があります。大学は中世起源のものでして、中世の普遍的な知識の共同体としてできたわけです。それが近代になって、国民国家の学校制度の中に吸収されてしまいましたけれども、もともとは国際的な機関ですから、たとえばアメリカで学位を取れば、ヨーロッパに行ってもドクターとかプロフェッサーと呼ばれます。国際運転免許のように、どこの国で学位を取っても外国で通用するという考え方が生きているわけです。

あと神聖ローマ帝国のようなものもありましたが、そのへんは省略します。

(2) ナショナリズム……普遍的な原理に抗して、国民国家が自己主張する運動

普遍性を食い破るものとしてナショナリズムの運動が大きく出てきたというのが歴史の順序でして、ナショナリズムの洗礼を受けた概念がインターナショナリズム、つまり国際化なわけです。

ナショナリズムの中身をみますと、キリスト教とか人類全体の知識とか、普遍的な原理は知られていたわけですが、それが地域の実情に合わない、われわれの生活と密着していない、だからもう少し身近なところから考えていこうということで、ある範囲の人々がまとまっていく。それが国民国家というかたちで政治的にもまとまってきて、強く自己主張していくことになりました。これがナショナリズムの運動と言われるものです。

初めは星雲状になっていて、どこが外国で、どこが自分の国かわからないんですが、何百年もかかってある範囲の人たちがまとまってくるわけです。

言語、これが非常に重要です。それから文化、風俗・習慣、法律、さまざまな社会制度、もう少し具体的になると経済主権の問題があって、どこで関税を取っていいかということになります。はじめは封建領主が勝手に関税をつくっていましたが、国王に禁止されて、国境という概念が出てきます。その中では自由貿易だけれども、国境を通過するときに関税を取る。取った関税で常備軍を雇って国家を運営するというのが絶対王政の初期

です。そういう経済主権の問題があります。

同時に租税を取るという権利もあります。初めは封建領主の十分の一税などだったのですが、人頭税、間口税、水車小屋税などの中世の租税体系が、だんだん物品税、所得税などの近代的な税制に整理されていく。税金を取る権利というのはとりもおさず国家主権ですから、国民国家の成立とほぼ対応しているわけです。

それから、人間を教育する教育権というのがありますが、どの言葉を使って、何を教えるかというのは国家の重要なポイントで、これも集中されていく。

また、人間の移動を制限するシステムができて、パスポート、ビザという制度が整備されていく。今日では当たり前の制度が、200年から300年ぐらい前にほぼ形を現してきた。ナショナリズムは思想運動であり、生活革新運動みたいな面もあるんですが、制度面ではこうした細かいことがたくさんあるわけです。

このようにして国民国家が1カ所でできますと、対抗上、ほかもまとまらないとしかたがない。だんだん国民国家が増えてきます。国民国家になり損ねたところは、ほかの国民国家、簡単にいえば列強に分割されてしまったり、宗主権を打ち立てられて植民地や半植民地になることを強いられる。そのころのツケが、東欧、ロシアなどにたくさんたまっているわけです。

国民国家というのは、初めからそういうものが存在したのだという顔をしておりますが、考えてみますと、かなりインチキくさいんです。たとえばフランスという国を考えてみると、フランス人がいたからフランスという国をつくったんだというのがフランスの公式見解ですが、事実は逆の面もあります。フランスという国家ができてしまったので、その政治的主権、経済的主権の中にいた人たちは、言葉や風俗・習慣をフランスの中央政府に合わせていって、フランス人になるしかなかった。隣の村でドイツの国家になってしまったほうは、ドイツ人になってしまった。そういうふうにも考えられます。

日本というのはそのへんが曖昧なんですが、ヨーロッパでは土地土地の民族、風俗・習慣、言葉が微妙に違って、またそれをよく意識しているわけです。スペインならバルセロナ、フランスでもバスク地方とかノルマンディー半島でノルマンがいたとか、そんなことがあちこちにありますが、今日でもそれが少し残っているわけです。フランス政府は強力に美しいフランス語と言うんですが、標準語を勉強しようという運動をして、フランス人をつくりだしていくわけです。ですから、フランス人がいたからフランス国家がで

きたというのは半面の真理ですが、もう半面の真理として、フランス国家ができたのでフランス人ができたということにもなるわけです。そうしますと、いったいどういう人たちがどういう国家をつくればいいのかということは未解決の問題、要するに腕づくの問題になるわけです。むごいといえむごい面もあるわけですが、近代の歴史はそういうものだったと思います。

(3)日本の場合、普遍性・対・民族性の争いが深刻に意識されることはなかった

日本の場合、中世的な原理、つまり人類普遍性を打ち破るものとしてのナショナルな原理、日本の民族性というものが、きれいに時代区分として現れてきているかということ、実は非常に曖昧なんです。

日本でも中世があったことになっていますが、教会に匹敵するものは仏教の教団、寺社でした。寺社も荘園を持って寺社領みたいになっていましたから、中世の修道院とか教会領と匹敵すると思われるのですが、教会領の場合、十分の一税を国境を越えてローマに集中する官僚機構なんです。しかし、仏教はそういう原理を持っていません。たとえば日本で集めた荘園の上がりやを中国に運んだとか、インドに運んだということは全然ないわけです。ですから、寺社領が中世の原理でどんなに上がりを取っても、日本国内で消費されているわけですから、インターナショナルな組織、人類普遍性を体現しているものではないのです。日本流の本寺・末寺関係になっていますので、ユニバーサルであるというよりも、かなりナショナルな日本ブランチ、初めから日本のお寺であるという面があります。

そのほかにそういう役目を果たすものがあるか。儒教はどうか、法律はどうかと考えていっても、ヨーロッパの各民族にまたがるような普遍的な文明の要素は非常に弱かったと言わざるをえない。ということは、逆にそれに対抗する英国国教会の運動、ドイツの宗教改革、イタリアの国土統一、フランスの絶対王政のように、よその民族と違ってわれわれが一つの国家をつくるべきだという主張が、16世紀から19世紀あたりに出ているかといえ、この要素も非常に希薄です。という面で、中世から近世への移行というのは、日本の場合には希薄なわけです。ヨーロッパのような普遍性対民族性の争い、ナショナルというものが強烈に意識されるという要素が弱かったのではないか。

その観念は、今の日本にもずっと尾を引いています。

ヨーロッパであれば、フランスとかドイツというのは人為的なもので、ナショナリズムを通過した一つの概念です。ところが日本では、人為的な、われわれがつくったという観

念に乏しくて、むしろ自然的な、昔からあった、というものです。日本というのは、人為的ではなくて、自然的な境界であると意識されています。

たとえば北方領土の議論をするときに、どのへんで切ると日本としていちばんまとまりがいいかという地勢学の問題になってしまって、どの時点でどういう条約があったからこれは日本だという話には、国民の頭がついていかない。そういう自然的な境界、自然的な人種として日本人があって、それが文化的な美德として伝統を持っていて、という話になってしまうわけです。

そうするとどうなるかといえば、われわれは近代を通過している関係で、自分たちを日本人と意識するわけですが、その日本は自然的なものであるという意識がありますので、単純にいうとナイーブなんですけれども、それは一種の内側になります。日本以外のものは外側であって、理解できないもの、自分たちではないもの、場合によっては怖いもの、接触しないほうがいいものである。なるべく内側に閉じこもっていたほうが楽だし、気持ちがいいということになります。これは自覚しないという点が厄介なんです。これを裏返しますと、自覚しないまま、内側は仲よくしていればいい、外の人はいないほうがいい、外の人があると邪魔である。外の人が反対の意見を持っていたら、われわれも反対すべきである、できれば外の人を征伐したほうがいい。こういうふうに、自覚しないまま外を攻撃してしまうという心理的特性を、どこかに持っているのではないかと思います。そうすると、状況しだいこういうものが出てくるわけです。

普通のおじさん、おばさんが突然竹槍を持って外国人を殺してしまったり、よそに行くとかさんざん悪いことをしても、帰ってくると普通の人になったりするというのは、起こりうることなんです。これは独自の歴史を抱えている日本が近代国家をつくってしまったことのお釣りのようなものだと思います。

しばしば、こういうのはアジアの特徴であると言われるんですが、これは日本の特徴でして、アジア全体に言えることではないというのが私の考え方です。その証拠に、韓国とか中国という近隣のアジア諸国のことを考えてみると、ちょっと行動が違ってきます。たとえば中国は、自分たちが自然的な境界によって囲まれている中国人だという考え方はあまりありませんで、中国という境界をつくることに2000年か3000年の昔から非常に熱心です。万里の長城のように、異民族との境界の塀を膨大な労力と資源をかけてつくっているわけです。日本人は、自分たちが日本人であることを確認するために、これだけ

の努力を払ったということはないわけです。専制的な王様が人民を駆り出したんだと説明されますけれども、人民も納得しなければあんなことはやらないわけで、やはり国民的な総意として大きな壁をつくったと考えられる。北のほうには地続きで怖い人たちがいましたから、不断に意識しているわけです。それでも、ときどきモンゴルや秦が入ってきて、政府を乗っ取って、何百年か支配していくわけです。これは非常に大きなコンプレックスとして中国の人たちにのしかからざるをえない。その王朝が300年ぐらいいして弱くなると、立ち上がって自分たちの王朝をつくったりします。

中国の場合には、異民族の王朝というのがとても多いんです。日本の場合には、天皇がそうだとか、騎馬民族説とか言われていますが、証拠がはっきりしない。証拠がはっきりしないということは、日本人がそういう意識を持っていないということです。日本には異民族の王朝に支配されたという経験がない。中国にはある。これ一つをとっても、中国というのは、日本人が考えているような自然的な境界で内側に閉じこめれるという単純な考え方ではできていないということがわかんと思います。

むしろ中国は初めから多民族国家です。多民族国家をどう統一するかということで、漢字をつくり、法律をつくり、儒教をつくりと営々と努力してきた人為的な社会です。その人為的な社会の現れが、儒教の礼や道徳の秩序、律令という法体系、科擧の官僚制、そして今日まで続いている中国人の政治好きです。そういう要素は日本には全然ないのではありませんか。そういう点から考えてみますと、日本人のほうのはるかにナイーブだと言えるのではないかと思います。

2. 日本の国際化はなぜむずかしいか

(1) EC: ナショナリズム⇒インターナショナリズムへの道

次に、日本の国際化はなぜ難しいかということです。

現在、20世紀から21世紀にかけての時代というのは、国民国家の体制が行き詰まって、次の体制を模索している時代と歴史上位置付けられるだろうと思います。

行き詰まりは明らかでして、初めは帝国主義というかたちで列強が争うという現象になったわけです。そして、1回目の戦争があって、勝ったほうが負けたほうに意地悪をしたわけです。すると、負けたほうは恨みつらみの固まりになって、もう1回、戦争になってしまいました。その間隙を縫って、国際共産主義という一つの普遍性を持った運動、新し

い境界も出てくることになって、非常に複雑になりました。初めは普遍主義の運動である国際共産主義と、資本主義の総本山であるアメリカが同盟してファシズムをやっつけるという構図で、2番目の戦争が起こりました。日本もファシズムのほうに入っていたものですから、負けてしまいました。その後、核兵器が発明されたために3番目の戦争ができなかったんです。3番目の戦争がもしあったとすれば、国際共産主義と資本主義の総決戦となるはずだったんですが、それがなかった。そこで根比べになって、国際共産主義が負けてしまったということで、今に来ているわけです。

戦争は紛争の一つの解決方法なんですが、戦争ではない方法で国民国家を乗り越える方法はないかと模索したのが20世紀の後半です。そのために、さまざまな国際機関ができました。国連を代表として、世界銀行、IMFなどの国際機関が調整役をする。それにとどまらない動きがいくつか出てきましたが、その典型がEC、ヨーロッパ共同体です。

ご存じのことですから、あまり詳しく述べませんが、簡単に言うと、今までナショナリズムの単位であったフランスとかドイツという国家を超えた中央政府、すなわちEC政府をつくり、議会をつくり、個々の政府が地方政府、日本でいえば地方自治体という位置づけになっていこうという、かなり大胆なやり方です。

ヨーロッパ人の感覚からいいますと、これはかなり思い切ったことであるけれども、実行可能なことなんです。なぜならば、たとえばバイエルンで考えてみると、ドイツはプロイセンのほうから出てきたわけで、ドイツの中央政府も地元とかなり違ったものである。自分たちはドイツかもしれないけれども、ババリア地方だと考えていて、ドイツそのものがかなり人為的なものなんです。だから、なるべく地方政府の権限を強くしてもらいたいと思っているわけです。ですから、ベルリンあるいはボンにドイツ政府があったものが、今度EC統合本部になったとしても、ちょっと遠くただで、考え方としてはそんなに変わらない。もともとドイツとかフランスは人為的につくったものだから、それが人為的にもっと大きなまとまりになったとしても、そんなに変わらないのではないかと考え方があります。デンマークのように、小さなまとまりだけで国家をつくって、上の大きな段階がないところは、ECに入ったのでは立つ瀬がないのではないかと反対しておりますが、おおむね賛成の人が多いというのは、もともと近代国家が人為的なもので、それをさらに大きくつくり直すことに心理的な抵抗がないからだと思います。だから、近代国家というのは国際機構に改造可能なものなんです。

日本の場合、日本の国家が人為的にできあがったということが十分自覚されています

ん。まず地方自治がそこまで強力でない。中央政府の言いなりみたいになっています。ですから、中央政府が別のものになってしまうということは大変な影響を与えるわけですから、日本でなくなるとは大変だということになります。だから、東アジア共同体というふうにはならない。日本人が考えた共栄圏というのがありましたが、共栄圏というのは日本には都合がいいけれども、ほかの国には都合が悪いというもので、共同体ではないんです。

そのことはおいておいて、日本の場合には共同体は考えられないんです。本当は共同体をつくるというのが国際化です。だけど、国際化、国際化と言いながら、共同体をつくるつもりは、はなからない。そうすると国際化はどういう意味になるかというと、今までみたいに内に閉じこもっていたのではまずいから、国際性を取り込んで、少し摩擦を減らすなり、外に門戸を開きましょうというような努力目標になります。これが国際化というわけです。

(2)日本史の基本リズム：＜外＞をとりこむ運動と＜内＞に閉じこもる運動

①聖徳太子の改革

こういう国際化では、いくら一生懸命やってもあまり効果はないだろうと思いますが、そうも言えないので、ちょっと歴史をさかのぼってみます。こういう意味の国際化であれば、日本人というのはずっと昔から国際化をやりっぱなしだったのではないかと私は思います。日本の歴史はいろんなふうに整理できますが、日本というのは積極的に外からいろんなものを吸収する運動と、外のものを取り込みすぎたので少し整理して日本に立ち返ろうという運動を、交替でおこなっていたと見えるわけです。

初めは弥生時代、古墳時代というナイーブな時期がありまして、聖徳太子の改革にまず注目すべきだと思います。私は聖徳太子は周恩来にとってもよく似ていると思います。周恩来はフランスに留学して外国語がよくできた。聖徳太子は中国語もべらべらで、10人ぐらいの話が一ぺんに聞けたというのは語学がよくできたという意味らしいんですが、国際的知識人でした。周恩来は、中国が欧米の近代化に遅れをとっているので4つの近代化、中国語では現代化と言うんですが、その旗を高く掲げた。それと同じで、白村江の戦いに破れて中国の実力をまざまざと知った日本は、このままでは国運が危ういということで、当時の世界水準に追いつくために4つの近代化、近代化ではないので古代化ですが、4つの古代化の旗を掲げようと言ったわけです。農業の古代化、工業の古代化、科学技術の古代化、国防の古代化、これは周恩来が言ったものそのままですが、ほぼ似ているわけです。

たとえば均田法を実施しました。これは農業の古代化ですが、今まで豪族が持っていた土地をバラバラにして公地公民制を確立する。国家が介入した中央集権型の社会主義経済をつくるということをやっているわけです。これは中国のアイデアですけれども、いちばん新しい考え方だからというので日本でもさっそくやったわけです。また律令、法政治制度を輸入して、今の政治改革よりよほど大胆なことをやっているわけです。あるいは兵制改革があります。それまではごろつきヤクザのようなものが血縁で集まって豪族と称していたわけですが、国が一般民衆から兵隊を募って、国が任命して天皇の命令で動くようにする。官僚制というのも、今までは血縁集団ですから、血のつながっていない人に命令するということは考えられなかったことですが、いろいろな氏姓の人が集まって一つの組織をつくるというものですから、相当大胆な革命です。あと大学制度、国分寺の制度、これはナショナル・アカデミーみたいなものだと思いますが、そういうことをします。簡単に言えば、日本の制度のうち中国の制度に置き換え可能なものは全部置き換えてしまうということを経済的に推し進めたわけです。

すると当然いろいろな混乱がありまして、勢力争いがあるのですが、大化の改新、物部氏の没落とかがまざまなことがありますけれども、だいたいこの方針は是とされて、以後、これを基本方針としていくわけです。遣唐使はそのいい例ですが、遣唐使は100年ぐらいいやっているうちに、そろそろ外国から学ぶことがなくなったとかいろいろな理屈がついて、やめになってしまいます。今で言えばアメリカにフルブライトで留学することが役に立ったんですが、だんだんフルブライトの熱も冷めてきて、アメリカから学ぶことはなくなったという言説が出てくる時期がやってくるわけです。

②国風文化

その後、平安時代、つまり国風文化の時代になります。国風文化の時代というのは、中国から持ってきた文物が崩壊的にデフォルメされて日本風になっていって、ポイントが忘れられていく時代ではないかと思っています。たとえば荘園制は公地公民制の反対です。それから武士が勃興してきますが、これは天皇を中心とする兵制の反対です。公家法、武家法ができてきますが、これは律令法と何の関係もない。要するに平安の王朝国家体制の根幹は、律令制に基礎は持っているけれども、それとは関係ないんです。こういうものを、だれ言うともなく自然につくってしまうということが起こります。

③安土桃山時代

これでずっとやっていまして、安土桃山時代になると西洋との接触が起こります。そこでいち早く、鉄砲、キリスト教、時計、工芸品などをちゃっかり輸入します。輸入するだけではなく、すぐつくってしまうという点がなかなか日本風です。鉄砲でもすぐつくってしまう。いい点は非常にフランクに取り入れるわけです。このときに聖徳太子とは違った動き方が出てきます。特に秀吉がそうですが、取り入れるだけではなくて、外に出ていこうという強烈な動きが起こります。秀吉だけではなく、和寇とか南方に行った日本人とかいろいろいますが、国際的に動き回る日本人が出てきます。秀吉は中国を占領したいと思ったんです。中国を占領するためにまず朝鮮と連合しようというので、朝鮮に使いを送ったんですが、うまくいかなかったので、まず朝鮮からやっつけようというので朝鮮征伐になりました。

この発想は分析されていませんが、ちょっと面白いと思います。日本は、その前に元寇といって、モンゴルに占領されかけたことがありまして、それが大きなショックになっています。それ以来、武士というのは外からの脅威に備えるというのが鎌倉幕府の大義名分になり、それ以来このときまで征夷大将軍という考え方がありました。秀吉の場合はその裏返しだと私は思いますが、中国を占領してアジアに軍事的な共同体をつくらうという発想までいったんです。稀有な日本人だと思います。これは中国にとってはよくあることです。モンゴルとかいろいろな異民族が入ってきて、中国の中央政府をつくってしまうということがあります。

これは歴史の“if”ですが、もし日本が中国を占領していたらどうなったかという、占領は割合うまくいったらと思う。しかし、2代、3代と続くにしたがって、日本の中国政府は中国化していかざるをえない。秦の本拠地がだんだん中国化していったように、日本が中国化していくことを帰結するわけで、その後の歴史の流れはずいぶん大きく変わったはず。中国、朝鮮、日本を一体とする東アジア何とかができていたかもしれないと思います。幸いかどうか知りませんが、そういうことにならないで、この動きは切れてしまった。

④鎖国～明治維新～大東亜共栄圏

そこで、さっきの力学からいって、その正反対のことが起こります。直接にはキリスト教なんですけれども、外を意識した内への閉じこもりを組織的にやってしまう時代が起こ

ります。これが再び外に開いていくのが明治維新です。明治維新を動かした勢力は尊皇攘夷派ですが、これはたいへんパラドシカルです。本来内側を意識して、外を排除するはずだったのに、政権を取ったとたんに関国してしまう。このことは、外に開くのと内に閉じこめるエネルギーは同一のものだということを表していると思います。これがどうしてひっくり返ったのか、私はまだ納得のいく研究を読んだことはないんですが、そういう補助線を引いて考えたほうがいいと思います。

明治維新のとき、指導者たちが開国ということの本気で考えていたかという、アメリカの船が来たからしょうがない、10年ぐらい開国してまた鎖国してやろうと思っていた人もいたらしいのです。

実際に開国してみると、とてもそんなことでは済まなかったのですが、心理的なコンプレックスとして、欧米列強に無理やり開国させられたというのがある。弱かったから開国したのであって、強ければ自分のテリトリーをつくって閉じこめられるわけですから、それが排外主義という試みで、ウルトラナショナリズムになってくる。しかし、このときになると、内に閉じこもうにも、天皇を中心とする立憲君主制とか近代の超克とか、国粹主義が出てくるんですが、たいていものは外来の思想の引き写しで、本当に内側のものではないという悲しさがあって、しょせんは二番煎じですから外国に負けてしまう。

戦後民主主義～国際化の時代

そうすると、また同じことで、戦後民主主義の時代のアメリカ化というのが起こります。これは、日本の制度をできるだけアメリカの制度で置き換えてしまおうということですから、4つの古代化と考え方は同じです。

当然摩擦が起こりますから、なし崩しの国風文化がどんどん出てくる。たとえば教育委員会の公選制はだめだとか、どんどんそんなふうになっていくわけです。アメリカ反対というのも草の根のレベルであります。それと共産党、社会党、社会主義が妙に結びついてしまう。

そういうものを経過して、コンプレックスは形を変えてきます。英会話をしようと思うとどぎまぎしてしまうくせに、アメリカも大したことないじゃないかと思ってしまう。また、今まで自分もアジアの貧しい国と似たようなものだったのに、かわいそうだとか、遅れているとか、第三世界に対する優越感みたいなものにステータスが変わってきます。

国際化は、ちょうどこういう時期に対応しているので、やや嫌な面もあるんです。こ

でも、外と接触するほど内に閉じこもりたくなるという逆説は生きていると思うんです。アメリカに何年も住んでいたり、留学して帰ってきた人に聞いてみると、アメリカは嫌だ、やはり日本はいいなと言う人がかなりいます。

(3)日本人には国際化の基礎条件が欠落している

私から見ますと、日本の外と内のメンタリティーというのは、千何百年の歴史を通じてずっと同じで、今でも同じだと思います。だから、この延長上でいくら国際化を考えても同じようなサイクルに巻き込まれてしまう。もしこうではないもの考えるならば、歴史をさかのぼって、日本人の内からする発想を脱皮する必要があるのではないかと思います。日本人がどうしてこういうふうに出てしまうかという、異なる民族との深刻な摩擦を経験していないせいではないか。国際化の基礎条件が欠落している。世界的な文明というのは、キリスト教から始まって全部、民族の摩擦を前提にしているんですが、それがない。日本人がいくら文化的なものを考えても、異民族に理解される要素がなかなかないんです。

3. 日本人は国際化のために、なにをしたらいいか

(1)勤怠の国際化

次に、日本人は国際化のために何をしたらいいか、ということです。

国際化というのは、皮相なレベルからいきますと、外との接触の割合が増えることでありと理解されています。簡単にいうと、

①外国語ができるようになる

②外国に旅行する

③外国の事情（文化・思想・風俗）に明るくなって何でも知っている

これが国際化であるとしばしば言われます。もちろんこれは国際化の条件ですが、十分条件ではない。

外国語は一つの手段にすぎず、外国語が全然できなくても国際化は可能であると思います。また、外国に旅行するというのは日本に戻ってくるわけで、外国にいる間はお客さんです。その枠を突破しないかぎり対等にはならない。外国の事情に明るくなるというのは、外国の事情に暗い人がいるから成り立つ商売であります。要するに情報ギャップに寄生しているわけです。こういうタイプの知識人がいくらいても、外国では絶対に通用しな

いわけです。これはアジア的ないし日本的な特徴だと思います。

以上をまとめてみますと、①から③は国際化としてある局面で評価されますが、それは内にとって外が希少であるという内側から見ての論理です。ということは、国際化とは反対の論理が支配する内側が厳然として生きているからこそ、外国語や旅行、外国の事情の知識が希少であって価値を持つという構造になっているのだと思います。これは国際化のように見えて、まだ国際化がなんら始まっていないということだと私は思います。

(2)日本の固有性・独自性に気がつく、自分がなにものであるか知る

では、どうしたらいいのか。①から③の先の何かを考えなければいけないんですが、まず日本の歴史の固有性、独自性を十分理解することではないかと思います。国際化というと、しばしば外国のことがわかればいいんだと思っていて、自分たちのことをちっとも知らないわけです。外国人は日本から来た人がいるというので、日本のことを聞く。そうすると、何も知らなくて答えられないから、もごもごしてしまう。おまえは何人なんだということなりまして、恥をかくというパターンです。まず自分が何者であるかをよく知って、それを説明できることが出発点ではないか。自分が何者であるかというアイデンティティーが確立して初めて、他者との関係がとれて、他者が尊重でき、他者とコミュニケーション、相互理解が可能になる。だから、国際化の原点はまず自分であるということがあると思います。

同じようなことで、英語を習うのもいいんですが、日本語を外国人も学べるように国際語として鍛えていくということも、国際化の一つの出発点です。英語を学んでばかりいてもしょがないので、日本語を変えるように足下から出発するというのが一つのやり方です。これは日本語の経歴を調べて、その語彙を整理することに通じるわけです。

(3)過去を十分に振り返る

また、時間的に知識を広げていくということで、自分を知ることの一環として過去を十分に振り返ることがあると思います。これは、歴史は面白い、もの珍しいからという好奇心の問題ではなくて、自分を何が拘束しているかという、その無意識を調べていくためです。歴史上の大きな出来事というのは、同時代の人や後世の人に大きな無意識の束縛を及ぼします。ですから、自分も必ず過去のさまざまな出来事に縛られているわけです。それに気がつかなければいけないのではないかと。自分が当然だと思っている発想を、日本

人は歴史上どの段階で信じ始めたかを確認していくことが、とても重要だと思います。

近いところで行きますと戦争責任の問題、従軍慰安婦の問題、あちこちで日本軍がばらまいて紙くずになってしまった軍票の問題、残留孤児の問題、戦争責任、教科書の歴史記述、戦争に対する補償の問題など、さんざん山積みになっています。

これを話題にすることは、どこかに心理的な抵抗がある。日本人の中のだれかの責任を暴きたてて追及することになるので、なかなかできないということがある。でも、これをやらなければどうしようもない。こういうことをやらないで国際化はできないわけです。500年前の朝鮮侵略の後始末とか、和寇のことも全部含まれますが、過去を十分振り返るということです。

(4)異文化について理解を深める

それから当然、異文化についての理解を深めるということもあるでしょう。これは文化人類学の方法です。これももの知りになるためにやるのではなくて、異文化が人間的な方法だとわかるということは、日本人の文化的なあり方は一つのあり方にすぎないというショックで、日本人はこのままでいいのかということを深刻に考えていくということだと思います。

(5)日本にいる外国人について、きちんと対応する

では、日常生活でどうしたらいいか。いろいろなことがあります。まず日本にいる外国人にきちんと対応することが重要です。というのは、日本は日本人がいるということしか前提にしていない社会ですから、そこに外国人が現にいるんだということが十分に見えなければ、自分たちの社会の運営の方法に気がつかないわけです。

それがきっかけだろうと思います。きちんと対応するというのは、制度的に保障するという意味ですから、国籍とか戸籍のほかに市民権という考え方をつくって、5年とか10年、20年、日本人でない人が日本社会にいる場合に、正当に扱われる方法を日本人が工夫していかなければいけない。これが制度的な帰結です。

市民権というのは基本的な人権に類するものですが、そのほかに教育を受ける権利、公務員になる権利など、社会権に匹敵するものがたくさんあります。こういうものをつくり直していくということは、日本にいる外国人にとっていいことだけれども、日本人にとってもいいことだと私は思います。

(6)日本の社会制度を、国際規格に合うように手直しする

そこで、日本の制度を国際規格に手直しするということをやすべきです。大学に関していえば、人事を国際化するとか、入学時期が9月だといいとか、日本で取った単位が外国で使えなかったり、その逆がだめだったりするのはおかしいから単位を互換的にしようとか、すぐできることをどんどんやる。日本政府も、日本独自の論理で動かないようにいろいろやろう。企業もやろう、地域もやろう。そういうことがたくさんあります。

(7)日本人の行動原理を、国際社会に適合的なように改める

制度的な問題でだいたい解決してくるのですが、制度的な問題を解決して問題を発見していこうと思うためには、日本人が今までと違ってこういう問題に注意深くなって、どこをどう直したらいいの、気がついていかなければいけない。発想の根本が変わっていかないとだめだということです。日本人の行動原理が今まで国際社会に適合的でなかったとしたら、それに注意しようということです。

今までの日本人の行動原理は、自分たちの社会の内側に何か問題があった場合、それをうまく解決しようというものでした。社会の内側というのは日本と考えてもいいし、地域と考えてもいいし、企業と考えてもいいし、学校やクラス、何局、何部、何課と考えてもいいのですが、とにかく自分の所属集団に問題があった場合、それをうまく解決するということに全神経が集中している。日本人はそれが非常にうまいんです。しかし、それ以外のことにはちっとも神経が集中しない。自分が所属していないから、問題がわからないんです。これを何とかしたい。

内側と外側はどう違うかというと、内側というのは問題の所在、状況をだいたいみんな理解していて、価値観、解決方法も共有している。ただ、ちょっとした行き違い、ものの見方、条件の違いでもめているわけだから、そこをうまく調整すればたいてい解決できてしまう。日本人の紛争というのは、そういうタイプのものが非常に多い。だけど、国際問題というのはその前提が怪しいんです。問題の所在や状況が理解されていなかったり、価値観が共有されていなかったりする人たち間の紛争なんです。そうすると、日本人は誤解の連続で、だいたいこじれて問題をひどくしてしまう場合が多い。そこで、内側の問題解決をしていこうという発想ではなく、外に通じる問題解決を内側でもしていこうと問題を立てないかぎり、国際的に見ると日本は閉じこもりになってしまうわけです。日本人が問

題を解決すればするほど、外を排除することになってしまう。そこで、脱日本的行動原理をとる日本人が増えてこない、国際化にならないということになります。

それには外国人が日本に来ればいちばんいいのですが、これはちょっと破壊的な面もあるので、日本人が変わるという要素がどうしても必要です。外国人がたくさん入ってきますと、ネオナチみたいなものが日本にも必ずできますので、そうならないように日本人が懸命に変わっていくためには、こういうふうを考えればいいのではないかと。

つまり、内側で問題を考えていたやり方の延長上で実行できるうまい方法です。私はいつもこう考えることにしています。内に閉じないようにするためには、常に外のメンバーが見えないけれども、そこにもう一人いると考えて行動する、発言する、決定する。たとえばこういう会合も、一つの内側を構成するわけです。いくつか空いている椅子がありますが、ここに当面考えなくていいことになっているだれかが座っていると考えるわけです。たとえば戦争責任について考える場合、日本人だけで考えてもだめです。ここに朝鮮、韓国の方が座っていると考える。ここにオランダの方、オーストラリアの方が座っていると考えるわけです。そして、彼が何を発言するかということをいつも考えて、ものごとを進めて決定していく。そうすると、日本人だけでも今までと一味違ってくるはずだと思います。これならすぐできる。日本人にとっては、そこに人間がいさえすればそれは内側になるから、彼のことを考慮するわけです。それによって一味違ってくるはずなんです。これなら明日からでもできると思っています。とりあえずこれをやろうというのが提案です。

4. さらに具体的には……

(1)日本の国際戦略の構築

これは心構えみたいなことですが、日本政府なり日本国家なりの対応として、PKOをはじめいろいろなことを迫られています。そういう面はどう考えたらいいかということなんです。今非常に難しい時期にあると思いますが、いくつかのことが言えると思います。

私は専門ではないので大まかなことしか申し上げられませんが、まず日本の国際戦略を構築しようということがあります。

国際戦略というと外国に攻めていくようにとられがちですが、そうではありません。世の中はこれからどうなっていくから、国際社会の秩序安定のために日本が何をしなければいけないかという責任を自覚する、見通しをはっきり持って責任を果たしていくという意味

です。今は見通しもなく、適当にその場しのぎをやっているんですが、それよりもましなことができないかということです。

私が思いますのに、アメリカの力は弱くなってきているけれども、当分ナンバーワンです。まずアメリカが中心にある。そしてECが大きな柱になる。それと同時にもう一つ、東アジアが大きな柱になる。アメリカを向こう側からECが支え、こちら側から日本が支える。そういう3つの極の1つとしての東アジアがあって、日本のはその中心になるという位置づけで問題を解決していくというスタンスが重要だろう。この体制はあと20～30年は続くと思いますので、そういう見通しをはっきり持つことです。

(2)アジアの共通項を模索する（大東亜共栄圏の総決算）

この見通しの中でどういう問題が起こるかということ、いろいろあります。

まず、東アジアはECと違って非常にバラバラだということがあります。それにはいろいろな理由がありますが、日本が朝鮮を植民地とし、中国を侵略し、その後始末がついていないからなんです。

どうしてそういう戦争が起こったかということ、共通の地盤がなかったということです。儒教文化圏といいますが、そうではないんですね。ECにはキリスト教があるけれども、日本には何もない。東アジアはバラバラです。しかし、そうも言っていられないから、共通項を模索していく必要がある。

そのためにはまず障害を取り除くべきで、東アジアの共通項を模索するために、戦争犯罪の決着をつけると同時に、中国、韓国と対話を繰り返していくという戦略をとらなければだめです。日本の地域的な基盤は東アジアにあると思いますから、そのことをきちんと自覚する。

(3)国際機構の設計

次に国際的な問題としては、国際政府ができない以上、国際機関によって国際関係を調整していかなければいけないけれども、既存の国際機関は国連を含めてみんな機能不全に陥っています。ですから、新しい国際機関を提案して、そのための費用負担をしていかないかぎりだめなんです。

では、どういう国際機関が必要なのか。

まず地球環境法、特に炭酸ガスの枠組みのために、経済成長の速度とかその具体的なあ

り方を調整していく必要があります。次に、お金の問題が非常に重要ですが、国際金融、通貨、外国援助の枠組みのために、今までのOECD、世界銀行、IMFに代わって、もうちょっときめ細かで柔軟なものにする必要がある。

これをまとめて解決するものとして、譲渡可能排出権構想、いわゆるエコライト構想というものがあります。簡単に言うと、炭酸ガスを出してもいいという切符をつくって、人口割り、国家割り、GNP割りで世界中にばらまく。そして、それを自由に売買できるようにする。第三世界は人口割りでもらった排出権を外国に売って、自分の国を発展させていく資金にしようという考え方です。これは難しい面もあるんですが、今まで提案された中ではいちばん合理的な方法ではないかと思います。これは一種の再配分ですから社会主義ですが、社会主義的な国際機構も現実化していく道があるのではないかと思います。

それから、国連があって、軍事や国際条約を束ねていますが、これは改組していく必要がある。五大常任理事国制というのは第二次世界大戦の終戦処理の体制のままですから、あまりにも時代遅れです。簡単にいうと、日本とドイツの位置づけが問題になっているわけです。しかし、日本とドイツが再軍備して、原爆を保有して、国連軍の総参謀本部に入るというのは非常にグロテスクなことから、そこまではやらなくてもいい。とすれば、常任理事国を2段階にして、拒否権を持っていて、国連軍の参謀本部を構成する五大国と、その下において、経済的な面で大きくサポートする日独、あるいはブラジルやインドを入れてもいいかもしれませんが、そういうものに改組するというのもう日程に上っていると思いますが、そういうことをすべきではないかと思います。

こういう問題は非常に緊急の問題ですが、日本政府に任せておかないで、国民各層が議論すべき問題だと思います。

(4)日本の労働組合は、＜内＞の原理（企業別）に圧倒されてきた

最後に、ここは労働組合の集まりですから、日本の労働組合についてちょっとだけ申し上げます。

日本の労働組合というのは、ヨーロッパの労働組合の組織原理とたいへん違って、内の原理がきわめて強くあって、内の原理に組合原理が圧倒されてきた面がある。それは企業別組合だからなんです。

企業別組合を解散して、ヨーロッパ流の組合に再組織するというのは無理ですから、当

面はできないにしても、少なくとも内の原理に支配されている企業別組合が内の権利ばかり主張しているということは、大きな意味で不必要に外を排除する差別に通じていくという面もあります。そこで、外の権利を保障するという要素を取り入れて、そういう方向に脱皮していくという目を運動の基本に据えていただければと日ごろ思っていますので、門外漢ですが最後に付け加えさせていただきました。